

1. 日本宣教の先駆的働き

① ギュツラフ

- ・ ロンドン宣教会の宣教師としてタイや中国で伝道し、1832年に琉球王国の那覇に寄港。
- ・ 臨海寺の近くに上陸し、この時集まってきた民衆や役人に漢訳聖書（中国語の聖書）を配布。
- ・ 一週間那覇に滞在し、琉球国王に贈り物とともに、三冊の漢訳聖書を贈呈。
- ・ マカオで、日本人の漂流漁民三人（音吉ら）を引き取り、彼らの世話をしながら、彼らから日本語を学ぶ。
- ・ 「約翰福音之傳」（ヨハネ福音書）と「約翰上中下書（ヨハネの手紙1、2、3）を翻訳し、1873年にシンガポールで出版。
- ・ 日本人の漂流民7人を日本に送り届ける目的で、日本上陸を試みるが、外国船打払令による日本側の砲撃を受け、やむを得ず引き返す。

② ベッテルハイム

- ・ ユダヤ人の家庭に生まれ、最初はユダヤ教徒。
- ・ 13ヶ国語の語学に通じ、医学の博士号をもち、精神科医としてエジプトやトルコで軍医を務めた。
- ・ イギリスでキリスト教に改宗し、イギリス人のエリザベスと結婚し、イギリス国籍を取得。
- ・ イギリス海軍琉球伝道会に志願し、ギュツラフの紹介で日本人の漂流民と会い、彼らから日本語を学ぶ。
- ・ 1846年5月、ベッテルハイム一家は那覇に上陸。
- ・ 上陸して半年後には街頭で説教をし、家々に宗教冊子の配布を行う。
- ・ 徹底した迫害にもかかわらず、入信する者たちが起こされ、受洗する者も与えられた。
- ・ 崎浜秀能^{よし}が入信し、日曜礼拝にも出席。家族による迫害の結果、亡くなる。日本における最初のプロテスタントの改心者であり、殉教者。
- ・ ギュツラフの監視兼通訳として派遣された役人を通して日本語や琉球語を学び、4福音書、使徒の働き、ローマ人への手紙を琉球語に翻訳。
- ・ 診療所を作り多くの病人を治療し、本土よりも一年早く牛痘接種を紹介。
- ・ ペリー艦隊の船でアメリカに帰国し、召天。

③ 開国

- ・ 1853年にアメリカのマシュー・ペリー提督が浦賀に来航。
- ・ 「太平の 眠りを覚ます 上喜撰（蒸気船） たった四杯（隻）で 夜も寝られず」
- ・ 1854年に日米和親条約を結び、その後、イギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を結ぶ。
- ・ 1858年に日米修好通商条約が調印され、函館、新潟、横浜、神戸、長崎の5港が開港。
- ・ 居留地内における在日外国人の信仰の自由や礼拝堂の設置が認められ、1859年に続々と各教派の欧米の宣教師たちが禁教下の日本に渡る決意。

2. 日本本土への宣教師たちの来訪

① ヘボン

- ・ 1859年10月18日には米国長老教会のヘボンが来日。
- ・ 大学でラテン語、ギリシャ語、ヘブル語を学び、このことが日本での辞書の編集や聖書翻訳に大いに役立つ。

- 別の大学で21歳の若さで医学博士号を取得し、結婚後、中国で医療宣教師として働く。
- 日本開国の知らせを聞き、44歳で長老教会のミッションに志願し、夫人と共に来日。
- まず医療活動を行い、多くの病人を癒やし、医者としての評判を得る。
- 早くから聖書翻訳を目指して、日本語を熱心に学び、その過程で『和英語林集成』を出版。
- 1880年に新約聖書が、1887年に旧約聖書が出版され、元訳と呼ばれて高く評価された。

「もし私が何かを達成したとするならば、それは私の学才がすぐれていたというのではなく、与えられた職務のひとつに専念し、それを完成するまで、その一事にしがみついて離れなかったという辛抱強さであった。」

② ブラウン

- 1859年11月1日に米国オランダ改革派教会のブラウンが神奈川に上陸。
- 結婚後まもなく中国に宣教師として渡り、マカオや香港で、学校の校長先生として教育宣教に携わる。
- 日本に上陸した時はすでに50歳であり、三人の子どもを伴った。
- 日本においても教育者として活躍。
- 「一人のブラウンが伝道するよりも、10人のブラウンが伝道するほうが良い」、「伝道は急務である。しかし無学な者が伝道するのは害である」との持論のもとに、日本人伝道者の養成のために心血を注ぐ。
- 植村正久、押川方義、井深梶之助、本多庸一等、日本の教会を背負う指導者たちが輩出

「我が国に渡来したすべての宣教師の中で、彼は最も尊敬に値する、と私は考えます。彼は私どもに、いつもこう言われました。『日本伝道の最も良いやり方は、日本の青年を教育することです。私の学校で、二十人の日本人説教者が教育されたんですよ。このことは、二十人のブラウンがよにつかわされたことを意味します。この人々は、私がするよりもどんなにかすぐれた大仕事をすることでしょうか。』」

- ブラウンが教えていたブラウン塾は、明治学院に発展。
- 新約聖書翻訳委員長として活躍し、翻訳を終えて、病気のため帰国。
- 翌1880年に、日本で新約聖書が出版された報を聞き、召天。

③ バラ

- ブラウンと共に来日。
- ブラウンと共に矢野元隆から日本語を習う。矢野はバラからの指示によって漢訳の福音書を邦訳しているうちにキリスト教の理解が進み、後に重い肺患を病み、病床でバラから洗礼を受ける。矢野は本土最初のプロテスタント信者。
- とにかく伝道の人として知られ、神奈川、東京、伊豆から信州にまで伝道の歩を伸ばし、多くの人々を信仰に導き、教会の土台を据えた。
- 「バラ氏は思想の人ではなく、活動の人であった。遠き将来の計を立てるといふ様な人ではなく、機を得るも得ざるも一心不乱に伝道をした人であった」
- 祈りの人でもあった。彼の説教には感銘を受けなくても、その熱烈な祈りに感激し、ついに信仰に導かれた人は少なくなかった。横浜バンドのリバイバルはバラの宗教的情熱と彼の人格と信仰だと言われている。

④ フルベッキ

- 1859年11月7日に長崎に上陸。
- 語学の賜物があり、オランダ語、ドイツ語、フランス語を自由に話せた。
- 青年時代にアメリカに渡り、コレラにかかって九死に一生を得て、献身を決意。
- ブラウンと同じ船で来日し、長崎で約10年間過ごし、士族の青年たちに英学を教えた。
- 教え子の中には大隈重信、副島種臣、岩倉具定（岩倉具視の息子）など明治政府において重要な役割を果たした人物がいた。
- 明治政府から東京に招かれ、大学南校（東京帝国大学の前身）の教頭として迎えられた。
- キリシタン禁令の高札の撤去に結びつく欧米使節団の派遣を提案し、立案した。
- 明治政府の外交に関する法律顧問という重責を与えられ、外交政策に対して大きな影響力をもち、政府の公職を辞した際には、明治天皇から勲三等旭日章を授与された。
- 大隈重信らの尽力により、家族は日本人と同じ待遇で日本永住を認められ、1898年、日本で召され、青山墓地に埋葬された。

3. 最初のプロテスタント教会の設立と高札の撤去

① 最初のプロテスタント教会の設立

- 宣教師のもとには英会話を学び目的で日本人の青年たち（特に士族階級）が集まってきていた。
- 青年たちが福音同盟会の推奨していた新年初週祈祷会を見て、彼らも旧暦の新年にこれを真似たいと願い、バラは祈祷会を始めた。
- 1872年3月10日に9名の日本人青年がバラから受洗し、すでに受洗していた2人に加え、バラを仮牧師として立て、日本における最初のプロテスタント教会である日本基督公会（現在の横浜海岸教会）が誕生。

② 高札の撤去

- 1867年に徳川慶喜から大政奉還がなされ、王政復古により明治政府が樹立
- 五榜の立札（第三札が切支丹・邪宗門の禁止）を全国津々浦々に掲示し、キリシタン禁制は続いた。
- 浦上四番崩れをはじめ、キリシタンの多数を逮捕、流罪とする事件が発生し、西洋諸国から反発を受け、大きな外交問題となった。
- 1871年から73年にかけて、不平等条約の改正と欧米諸国の視察のために、岩倉具視らが欧米諸国への使節団として派遣された。
- 一行は行く先々で、キリシタン迫害について非難を浴び、条約の改正にはキリシタン禁制が不可欠であることを悟り、政府に電信で報告。
- これが大きな引き金となり、1873年2月24日に、キリシタン禁制の高札が撤去され、また、浦上信徒の郷里への復帰が認められた。
- 徳川幕府以来260年続いたキリスト教禁教政策は終わりを告げた。
- しかし、公認ではなく黙認であった。

4. 初期プロテスタントの三大源流

① 横浜バンド

- 横浜バンドの出発点は日本基督公会の誕生。
- 中心となったのは、ブラウンとバラの塾で育てられた士族の青年たちで、植村正久、井深梶之助、本多庸一、押川方義。植村正久が代表的な人物。

- 植村は徳川の旗本に生まれる。大政奉還で一家は没落し、赤貧洗うが如しの生活を送り、長男である彼は一家を建て直すには英学を取得することが最善だと考え、ブラウンやバラの指導を受けた。
- 16歳で洗礼を受け、その後、伝道者としての召しを受け、富士見町教会、「福音新報」主筆、東京神学社光町、日本基督教会の伝道局長として、それぞれの分野で大きな足跡を残した。
- 横浜バンドは宣教師の影響により、信条や神学を重視する姿勢で、長老制を取り、日本基督教会という戦前最大のプロテスタント教会となっていく。

② 熊本バンド

- 熊本藩は近代化の時流に遅れをとり、人材の育成を図るべく、熊本洋学校を設立。
- 校長としてアメリカからジェーンズを招く。
- 南北戦争で北軍の少尉として活躍し、大尉に昇進した人物。
- アメリカの陸軍士官学校の規則正しい教育とイギリスのラグビー校の人格教育を目指した。
- 教育は峻烈を極め、学業や素行の面で不十分な学生は容赦なく退学が命じられ、一回生として46名のうち卒業したのは11名、二回生72名のうち11名、三回生、四回生は卒業生ゼロ。しかし残った学生たちの進歩は目をみはるものだった。
- 最初の頃はキリスト教について一言も言及しなかった。まだ禁教の頃でもあったから。三年経ったある日、学生たちに自宅で聖書を教えることを伝え、やがて30-40人集うようになり、この集会の中から信仰を告白する者が続出した。
- かねてから信仰を告白していた者たちが花岡山に登り、祈り会を開き、奉教趣意書に署名して信仰を表明。
- これに驚いた学校関係者はジェーンズの解任を決議し、学生たちには信仰を捨てるように迫ったり、自決を迫る者もいた。
- 多くの者たちが信仰を守り通し、熊本を去る前に22名に洗礼を授けた。
- 洋学校は閉鎖され、学生たちの多くはジェーンズのアドバイスもあり、新島襄によって新設された同志社大学に移り、そこで学ぶ。第一回の卒業者はすべて熊本バンド出身者。
- 代表的人物は海老名弾正。ジェーンズの感化もあり、信仰は進歩的・自由主義的なものだった。
- 後に植村正久と神学論争を繰り広げる。
- 信仰は国家主義との結びつきが強く、晩年にその傾向は強まっていった。

③ 札幌バンド

- 北海道の開発のためには人材育成が必須であるとして、北海道大学の前身札幌農学校が設立。
- 初代教頭に赴任したクラークは、アメリカの農科大学で学長をしていた。南北戦争で従軍。
- クラークは勉学だけでなく、徳育にも重きを置き、一人一人の学生に英語の聖書を渡し、授業の前に聖書の輪読を行った。
- 一切の校則をやめて、「紳士たれ」の自覚を学生たちに求めた。
- 学生たちの成長は著しく、視察に来た人が驚いたが、わずか8ヶ月の在任だった。
- 札幌を去るに当たって、「イエスを信ずる者の契約」に署名を求め、1期生全員が署名した。
- 2期生の多くも署名した。内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾らがいる。
- 内村は無教会主義キリスト教の基礎を築き、新渡戸は国際連盟事務局長を歴任し、宮部は世界的な生物学者となった。
- 札幌バンドは、学校で始まったことから、集会のあり方として最初から個人主義的、無教派主義的傾向が強かった。